

翻訳

スポーツにおける平和思想の起源について

ミヒヤエル・クリューガーⁱ著、有賀 郁敏ⁱⁱ訳

スポーツにおける平和思想の起源、すなわちスポーツにおける平和の理念は、ピエール・ド・クーベルタンと近代オリンピックの創設に遡る。以来、この理念は再確認され続け、現行のオリンピック憲章にも継承されている。オリンピックスポーツは「平和な社会」の構築に貢献すべきである。本稿は（オリンピック）スポーツにおける平和の特異な内容を体系的に論じるとともに、その歴史的変遷を考察する。オリンピックスポーツにおける平和概念の特質は力と競争を基盤としている点にある。スポーツの闘争的性質こそが平和と公正の基盤である。スポーツにおける、そしてスポーツを通じた平和は自由の中でしか実現し得ない。

キーワード：平和、オリンピズム、ピエール・ド・クーベルタン、闘争心、公平

現下の戦争を前にして、スポーツと平和そして平和政策との関係について改めて疑問が投げかけられている。本稿ではスポーツにおける平和思想の生成と発展について体系的な視点と歴史的な観点の両面から概観する。その際、近代オリンピックとピエール・ド・クーベルタンによるその「発明」から探究したい。ここでは、（オリンピック）スポーツの平和思想の意味と重要性をそれぞれの社会的、文化的、政治的文脈で分析し、解釈する¹⁾。

論文の冒頭の部分では、オリンピック創設に関する平和理念の重要性を詳しく取りあげる。それは1900年頃のヨーロッパにおける平和運動の文脈に位置づけられる。1936年のベルリンオリンピックはその頂点であると同時に、オリンピック創設期のスポーツと平和に関する、ある種の転換点でもあった。本稿の後段では、冷戦期から現在に至るまでの平和運動のさらなる発展に焦点を当て、最後にオリンピッ

ク創設期の平和運動におけるレトリックの役割について考察する。

1. 戦争と平和の狭間にあるスポーツ

19世紀末、近代オリンピックが創設されるまで、スポーツが平和に貢献できるとは誰も想っていなかった。ピエール・ド・クーベルタンでさえ、そのことに対し疑問を表明していた。1896年にアテネで第1回近代オリンピックが開催される以前、国際オリンピック委員会（IOC）の会報で、彼は「陸上競技は平和を保持するためにも、戦争の準備のためにも、同じように活用できる」と述べている²⁾。重要なのは、「それをどちらの方向に安定させるか」だけだ、と。彼にとって陸上競技とは、古代から受け継いだスポーツを指しており、近代のオリンピックに「再導入」したいと考えていたものである。それは競技と成績を重視した存在であった³⁾。

身体運動そしてオリンピックのモットーである「より速く、より高く、より強く」、つまりより優れ

i ドイツ・ミュンスター大学教授

ii 立命館大学名誉教授

た成績と進歩の追求が掲げられた。このモットーはクーベルタンの親友であるアンリ・ディドン神父によって考案され、1894年にソルボンヌ大学で開催された会議の際に文献学者ミシェル・ブレアルの提案により提起、1924年のオリンピックで初めて公式に公表されたものである⁴⁾。クーベルタンはスポーツを世界平和に貢献する新しい社会運動として確立したいと考えていた。これは今日でも「スポーツの世界政府」とも呼ばれるIOCの目標となっているが、IOCが国家を代表する政府ではなく、スポーツを国際的かつ普遍的な文化現象として位置づけたグローバルに活動する非政府組織であるため、目標の実現に対しては疑問符も付された。それにもかかわらず、IOCは1894年の創設以来、世界のスポーツとその組織の権力をめぐる独占的な地位を確立し、今日まで維持することに成功している。

オリンピック憲章はオリンピック運動の憲法のような存在であり、その冒頭で平和への貢献という目標が強調され、繰り返し叙述されている。オリンピック憲章の「基本原則」第2条には、「オリンピズムの目標はスポーツを人類の調和のとれた発展に役立て、人間の尊厳の維持に关心を寄せる平和な社会を促進させることにある」と記載されている⁵⁾。

平和という概念はIOCが「オリンピックのレガシー」と表現する、オリンピックが開催都市および世界全体にもたらす長期的な「恩恵」の中心的な要素である⁶⁾。両世界大戦期のある時期においてオリンピックは開催できなかったが、それでもその「オリンピック」もIOCの年表に記載された。スポーツを通じてより平和な世界の構築に貢献したいという主張は、その結果としてオリンピックの競技やトップスポーツだけでなく、国際機関、国連、ユネスコも支持する「スポーツ・フォア・オール」という思想や運動など、スポーツ運動全体の自己認識の一部となっている⁷⁾。しかし、競争的なスポーツモデルとその平和構築の可能性については批判も存在した。すなわち平和運動にとって、代替的と自認するスポーツにおける闘争や攻撃性が平和な世界への障害と

みなされたのである⁸⁾。

スポーツの平和的な機能をめぐっては、ミヒヤエル・ユルグスが感動的で理想化された物語「大戦争の中の小さな平和」で伝説的なものとなった。1914年の西部戦線における塹壕で対峙していたドイツ、フランス、イギリスの兵士たちは、クリスマスと一緒に祝いクリスマスキャロルを歌っただけでなく、一緒にサッカーも行ったのである⁹⁾。

しかし、それは単なる一過性のトピックにすぎないのか、それとも実際にスポーツを通じて平和を築くことができるのかという問いは今日まで未解決であり、議論対象となっている。スポーツによる平和は現実ではなく希望のレベルに留まっている。しかし、その逆も同様である。ジョージ・オーウェルが主張したように¹⁰⁾、スポーツが戦争、攻撃性、暴力、非人間性を助長するという見解もまた実証的に裏付けられていないスポーツのディストピア像であり、平和をもたらすスポーツというオリンピックの理念がユートピアであるという主張と同様と言えよう¹¹⁾。

2. 戦争に備える手段としてのスポーツ

クーベルタンは過去の体育が「戦争の準備」のために利用されていたことを知っていた¹²⁾。兵士は戦争で生き残るために身体的な訓練と鍛錬を行う必要がある。彼はギリシャの歴史と神話、特にホメロスが綴ったトロイア戦争の物語を熟知していた。ギリシャの英雄たちは包囲された都市の中で退屈していたが、気晴らしと身体能力や技能を鍛えるために、彼らはアキレスの友人である「英雄」パトロクロスが戦死したことを記念して葬祭競技を開催したのである。これはオリンピアで行われた競技会の起源またはモデルと考えられている¹³⁾。

古代では「競技」という言葉は存在していない。古代オリンピックでは競技ではなく戦いが繰り広げられたのである。1852年にベルリンの歌劇場で講演を行ったペロボネソス半島の聖地の発掘を訴えた考古学

者エルンスト・クルティウスは、ギリシャ人が開催した「オリンピア祭典」について語っている。ドイツ人はオリンピアを発掘し、科学的に研究してギリシャ文化の偉大な伝統を受け継ぐべきだというのが彼の見解である。平和的な人間だったからではなく、戦争の勝利に成功し、敵（当時はペルシャ軍）に対して自分たちの文化を守ったことが評価された。クルティウスはギリシャ人がペルシャ戦争で勝利した理由を彼らの「高潔さ」を理由に説明した。「マルドニオスよ、お前は我々を金や銀の争奪ではなく、高潔さを争う者たちに対して戦わせたのだ」と。彼はペルシャ戦争の歴史家であるヘロドトスを引用している¹⁴⁾。ヘロドトスは高潔なギリシャ人と野蛮なペルシャの侵略者たちとの違いを強調した。戦争は「万物の父」（πόλεμος πάντων μὲν πατέρι ἐστι）であると哲学学者ヘラクレイトスは考えた¹⁵⁾。

現代に至るまでこの考え方は体育、体操、運動、遊び、スポーツに関する議論を支配している。軍事目的および軍隊におけるスポーツは、現在においても依然として重要な役割を果たしている¹⁶⁾。スポーツは正義の大義のための、キリスト教西洋文明の防衛のための、あるいは最終的にはナショナリズムの時代において、あらゆる敵から国家を防衛するための、すなわち戦争に備えるための身体と精神の訓練手段である。スポーツは憎しみ、暴力、残虐行為を鍛成し、訓練するためにも利用される。つまり、「戦争の準備」にも利用できるのである。最も恥知らずな侵略者たちでさえ自分たちの行動を何らかの形で倫理的に正当化するための議論を生み出す。ロシアのプーチン大統領の例からもそれが理解できるだろう。

3. 国際性と民主主義 — オリンピックスポーツの平和の理念

「オリンピックの復活」とオリンピックの（平和）理念の策定により、戦争準備のための身体運動、遊びスポーツの利用という回路は打ち破られた。スポーツと競技は政治や経済から自由で独立した固有の

目標を追求し、最終的には「平和の定着」に貢献すべきであるとされた¹⁷⁾。クーベルタンは現代社会の発展が「国際化」と「民主化」という二つの方向に向かっているという事実からこの希望を抱いたのである。この傾向は現代スポーツの展開にも垣間見られる。スポーツは世界中の「スポーツ選手」たちが互いに対戦し、こうした競技会が開催されるべきだと考えられている¹⁸⁾。さらに、スポーツは「民主的」であるとも述べられている。「スポーツ競技」とりわけラグビーなどのスポーツは「民主主義の学校」であり、チームや選手たちは「小さな民主主義」、「民主主義の細胞」である¹⁹⁾。選手たちは共通のルール、特にフェアプレーのルール（クーベルタンが表現した「騎士道精神」）に従って闘い、そのルールによって互いに結びついている。彼らはスポーツを通じて、強く、自信に満ち、自立した人格に成長し、平和を実現することができる。ルールとフェアプレーは相互の敬意のもと、エキサイティングかつ非暴力で人道的な競技を保証する。スポーツでは階級、宗教、身分、その他人間を区別する要素とは無関係にスポーツの成績と努力の姿勢だけが重要であると論じられる。「人生で大切なのは勝つことではなく闘うことである。重要なのは勝つことではなく、よりよく闘うことである」とクーベルタンは1908年のロンドンオリンピックでのスピーチで述べた。「これらの規範を広めることは、よりいっそう勇敢で、たくましく、誠実で、寛大な人間を準備することである²⁰⁾」。競技が始まる前はすべての者が平等で、終わって初めて誰が勝ったかがわかる。勝者と敗者は競技の結果を受け入れて、再戦に備え、敗者に新たなチャンスが与えられる。民主主義の国での選挙でもそうであるように、そうあるべきなのである。このスポーツ・オリンピックの精神で育まれた人類はより平和な世界を構築することができるだろう。

スポーツとスポーツ競技は戦争とは根本的に異なるものである²¹⁾。戦争には公平性など存在しないが、戦争と戦争遂行を規則によって人道的にしようという試みは繰り返し行われてきた²²⁾。「戦争の文明化」

は成功しなかったが、「スポーツの文明化」は成功した²³⁾。

スポーツによる平和の理念とオリンピックの復活の構想は、クーベルタンが1892年11月にパリのソルボンヌ大学で開催されたフランス体育協会連合(Union des sociétés françaises de sports athlétiques, USFSA)の会議で初めて表明したものである。原稿の最後の段落は次のような文章で締めくくられている。「漕手、走者、剣士を輸出しよう。これが未来の自由貿易であり、それが古いヨーロッパの慣習に導入される日が来れば平和の大義は新たな強力な支援を得ることになるだろう²⁴⁾。」

この演説は「オリンピック宣言」としてスポーツ史に刻まれている。クーベルタンはここでオリンピックの復活をすでに提案していた。しかし、彼の提案は受け入れらなかつた。彼のアイデアが実現したのは、2年後、同じソルボンヌ大学で開催されたIOC創立総会であった²⁵⁾。

最近まで行方不明だったこの演説の原稿は2019年にニューヨークのザザビーズのオークションの際、880万ドルで落札された。購入者はロシアのオリガルヒ、アリシェル・ウスマノフ、元国際フェンシング連盟会長だった。ウスマノフはロシアのウクライナ侵攻以来、EUおよび米国の制裁リストに掲載されていたが、この原稿をIOCに寄贈したのである²⁶⁾。

4. 武器を捨てよ

国際交流、自由貿易、相互理解、交流と交渉そして共通のルールと価値観の合意を通じて、スポーツが世界平和に貢献できるという考えは、19世紀の終わりにクーベルタンだけが抱いていたものではなかつた。平和イニシアティブの共通の基準点はヨーロッパの啓蒙思想イマヌエル・カントの『永遠の平和のために』(1795年初版)や、1784年に発表された「世界市民という視点から見た普遍史の理念」という論文にも記され、そこでは戦争を回避するために「民族」間のあらゆる問題を議論できる「諸民族国家連

合」の創設が提案された²⁷⁾。

カントはクーベルタンの考え方と一致する平和の概念と人間観を提唱した。彼は技術面だけでなく道徳的、倫理的側面つまり永続的な平和の可能性という観点からも進歩は可能だと考えていた。しかし、それはカントが言うところの「曲がった木」から彫琢した人間を「理性」へと導くことに成功した場合にのみ可能と考えられていたのである²⁸⁾。利己主義、恣意的な支配、暴力に傾倒する人間の「非社交的な」側面は法によって抑制することができ、また抑制されなければならないと彼は主張する。「それは人間の改善に明らかに反しているように見える（利己主義、競争、嫉妬、攻撃性）²⁹⁾」が結局のところ進歩を促進させるのである。なぜなら、「あらゆる面での暴力とそこから生じる苦難」が「人びとをして法に従うよう促し、それによって社会的・経済的・技術的な進歩を可能にする³⁰⁾」というカントの考え方は、人間の攻撃的な性質を利用することを通じて人間同士の平和が可能であるという結論に行きつく。つまり、制御された暴力、規則的な競争と抗争によって平和が実現するというパラドックスである。

この平和の考え方はクーベルタンのスポーツ競技に関する考え方と非常に近い。スポーツ競技は進歩と平和を妨げるものではなく、むしろそれを可能にするものであると彼は考えた。カントと同様に、クーベルタンも身体的な進歩、公正な競技を通じたスポーツの成果の向上は、最終的には人間の道徳的・倫理的な最適化につながると理解していた。このようなスポーツ的・オリンピック的な教育によって初めてアスリートは平和を実現する人格へと成長するのだ、と。つまり、カントだけでなくルソーをはじめとする他の哲学者たちも提唱した「実践的理性」(カント)によって、人類の道徳的向上、人間性への到達を目指すというヨーロッパの啓蒙主義の目標がオリンピックの理念にも投影していたのである。

しかし、この考え方を徐々に実践的な政治行動に移そうとする試みがなされるまでには、さらに約100年の歳月を要した。この新しいヨーロッパの平和政策

の文脈には現代におけるオリンピックの復活も含まれている³¹⁾。1914年に実際に起こった大規模な戦争の危険性は多くの人々を不安に陥れた。1899年、ヨーロッパ各国政府の代表者がハーグで最初の平和会議を開催し、戦争に関する規則、いわゆる「ハーグ陸戦条約」を採択した。スイスとフランスを中心に国際的な平和運動が形成され、ベルタ・フォン・ズットナーは各国政府に対して次のように訴えた。「武器を捨てよ」—これは1890年に出版された彼女の著書のタイトルであり、平和運動の最も重要かつ著名なスローガンとなった³²⁾。ダイナマイトを発明したアルフレッド・ノーベルは、1895年に「平和賞」を創設し、1905年にはズットナーが平和賞を受賞している。

この国際平和運動の代表者たちは、1894年に開催されたIOCの創設総会にも出席してクーベルタンのイニシアティブを支持した。1894年のオリンピック会議の50人の名誉会員リストには国際平和運動の著名な人物、後にノーベル平和賞を受賞したフレデリック・パシーやベルタ・フォン・ズットナーの夫であるアーサー・ガンダッカーなどの名前も載っている。ベルタ・フォン・ズットナーは1896年のアテネオリンピックの年に、彼女の雑誌「武器を捨てよ！」にハンガリーのIOCメンバーであり、友人であり、同志でもあったフェレンツ・ケメニーが執筆した「アテネの祝祭日に捧げる記念文」を掲載した。ケメニーはこの記念誌の中で、オリンピックを「平和の仲介者」、「人類文化の節目と転換点」そして「欧洲連合」の形成の出発点と評している³³⁾。

クーベルタンとケメニーはドイツでも支持者を獲得している³⁴⁾。とりわけ1896年にクーベルタンによってIOC委員に任命されたヴィリバルト・ゲブハルトはその一人である。ゲブハルトは様々な反対にもかかわらず、アテネオリンピックに選手や体操選手からなるチームを派遣することに成功した³⁵⁾。彼の計画はドイツ貴族社会の一部とドイツ平和運動の両方から、それぞれ異なる動機ではあったものの支持された。ソルボンヌ大学で開催された会議では、フ

レデリック・パシーの提案によりケーニヒスベルクにあるドイツ平和協会の会長であり、またSPDの政治家でもあったリヒャルト・フェルトハウスが1894年のオリンピック会議の「名誉会員」に選出された³⁶⁾。ゲブハルトはドイツの平和活動家クリストフ・モリツ・フォン・エギディ（1847-1898）からも支援を受けた。エギディはザクセンの軍人だったが、平和主義的な態度ゆえに除隊していた。1897年2月22日、スポーツについて触れた際、彼は次のように語っている。「平和とは、もはや戦いがなくなることではなく、戦争がなくなることである」。この見解は激しい競争とルールに基づく公正なスポーツを通じて平和を実現するというクーベルタンの考えと一致していた。「平和を愛する者は、戦争で価値があったとされる代替物を探している」とエギディは続けた。「戦争の準備には私たちにとって欠かせない要素もいくつかあった。人は力強い人間でなければならない。愛は力である。人は弱さからではなく、より高いものへの喜びから戦争を克服しなければならない³⁷⁾。」

「平和を望むなら、戦いに備えよ」—この言葉は、力と抑止力による平和を信じる者たちのモットーとなった、キケロの言葉である。平和は、その敵と戦い、勝ち取らなければならない、それがオリンピック競技の支持者たちの考えでもあった。この考えは新約聖書マタイによる福音書5章39節で説かれていることや、あるいはマハトマ・ガンジーが実践したような平和主義とは非対称である。また、1970年代および1980年代の平和運動そして一部は現在に至るまで、この考えが支持されてきたこととも対照的である³⁸⁾。

5. (オリンピック) スポーツにおける スポーツと平和の概念について

クーベルタンはスポーツと平和に関する包括的な概念を提唱し、それは現代に至るまでスポーツの理解に持続的な影響を与えており、クーベルタンやオ

リンピックスportsに直接言及がなされない場合でも現代のスポーツ教育や社会教育の概念に溶け込んでいる。ヴォルター・ニグマンがクーベルタンの著作を分析して論じているように、クーベルタンは優れたスポーツつまり彼にとってそれは競争的で競技的な運動競技であるが一は、オリンピック精神のもとで3つの位相で平和の構築に貢献できると考えていた³⁹⁾。

まず、個人レベルではスポーツを通じて個人が身体的および精神的・感情的な欲求のバランスを保つことができるようになる。攻撃的な感情はスポーツによって発散される。スポーツ教育学者オモー・グルーペ（2001）によれば、個人レベルでは（オリンピック）スポーツは「自己への取り組み」つまりスポーツ面だけでなく、人間的、道徳的側面においても己の完成、より良くなりたいという願望を追求する。したがって、グルーペはオリンピックの理念を「教育的」であると一貫して主張しているのである⁴⁰⁾。オリンピックスportsが身体能力だけでなく人格や性格の総合的な教育、内面のバランス、進歩と最適化の追求を教育目標としていることがヨーロッパ以外、とりわけアジア文化圏の人びとが体操を通じてオリンピック精神や国際的な（オリンピック）スポーツに触れるきっかけとなった理由の一つである。その代表者は日本の「クーベルタン」と称された柔道の創始者、嘉納治五郎である。彼はアジア文化圏出身者として初めてIOCのメンバーとなり、禅仏教の伝統に基づく特別な教育的理念をクーベルタンと同じくスポーツに組み入れた⁴¹⁾。

第二に、スポーツの社会的側面である。挑戦的な運動競技、スポーツ競技における協力と対立、特に現代のスポーツゲームでは個人はルールを守り、パートナーや対戦相手を尊重し、相互に敬意を抱き接することを学ぶ。クーベルタンはこれを「相互尊重」（Le Respect Mutual）と呼んだ⁴²⁾。ニグマンの分析によると、スポーツが社会的な平和に貢献することはスポーツのルール、価値観、規範が貧富、老若、強弱、出身や宗教に関係なく、すべての人に平等に適

用されることを意味する。そのことから、スポーツそのものは一種の現代的な宗教、すなわち「アスリートの宗教」（religio athletae）であると、クーベルタンはベルリンオリンピック（1936年開催）前のラジオ演説（1935年）で語っている⁴³⁾。ニグマンによれば、スポーツにおけるそしてスポーツを通じた個人的な平和と社会的平和というこの2つの位相は、クーベルタンにとってオリンピックの平和の理念の第三の位相、すなわち国際政治と世界社会におけるスポーツの重要性という理念の基礎となった。世界中から集まった選手たちが公平さと連帯というオリンピックの精神のもとで交流すれば、彼らは人びとの模範となり、スポーツの場で規則的な競技、相互理解、平和が政治の領域でも機能しうることを行動で示すことができる⁴⁴⁾。

クーベルタンは「オリンピック休戦」の概念がユートピアであることを認識していたが、人びとがスポーツを通じて互いを知り、尊重し合うようになるという条件のもとでは、それは現実的であると考えていた。「各国に相互に愛し合うことを求めるのは、ある種の子どもじみた考えだ」と彼は1935年のラジオ演説で述べた。

「各国に互いを尊重するよう求めるることはユートピアではない。しかし、互いを尊重するには、まずお互いを知らなければならない」と付け加えた。スポーツとオリンピックが平和に果たす役割についてのこの見解は、彼自身の評価によれば歴史に関する正確な知識と研究に基づいていた。

なぜなら、オリンピズムは本質的に歴史記述の一部だからだ。オリンピックを祝うことは歴史に言及することである。[…]。今後、100年にわたる綿密な研究と地理的状況を考慮して教えるべき世界史こそが、真の平和の唯一の真の基礎である⁴⁵⁾。

クーベルタンの平和観はイマヌエル・カントのそれとほぼ一致していた。カントもクーベルタンも、少なくとも暴力や攻撃性を無条件に否定し、戦争にも良い面があることを理解しない平和主義者ではなかった。両者とも単に道徳的な理由から戦争を否定

したのではなく、戦争は人間の尊厳に反し、「不正」であり⁴⁶⁾、スポーツやオリンピックの観点から言えば、不公平であるから戦争を否定した。カントもクーベルタンも平和は「正義」、あるいはスポーツのようにすべての当事者が合意したルールによってのみ可能だと考えていた。それは個人の私生活における社会的交流における「社会契約」（ルソー）であり、国家間の国際法であれ同様である⁴⁷⁾。この平和の理解は強さに基づいている。なぜなら強くて対等なパートナーによってのみ、法の遵守が保証されるからである。この平和の理解の基本とは、規則と基本的な価値観に基づく競争、すなわち競技である。「永遠の平和」とは、墓場の静けさではなく、強さを持つ人間の進歩による平和なのである。

カントが国際法に関してこの「永遠の平和」の理解を現実的だと考えたのと同様に、クーベルタンも平等で公平な機会に基づくスポーツとスポーツのルールによる平和が可能であると考えていた。クーベルタンがカントに直接言及した史料はないものの、両者は民主共和国では独裁国家や独裁政権よりも戦争の危険性が低いという見解を共有していた。カントによれば戦争と平和について自ら（共同）決定できる国家市民は、戦争がもたらす苦難を知っているため戦争を選択する傾向が少ないという⁴⁸⁾。

スポーツやスポーツ競技においてクーベルタンと彼のオリンピックの理念が伝えた教育的メッセージは、人びとは平和に対するこの姿勢を身体鍛錬と同様に学び、実践し、訓練することができるという内容であった。人びとは自ら体験し、また観客として、戦争で互いに破壊し合うよりも強くて対等なパートナーや対戦相手として競技に参加することができること、あるいはカントが述べたように、戦争という「ひどいゲーム」に巻き込まれるよりも快適なものを実感できるのである⁴⁹⁾。

6. 平和のシンボル

平和のメッセージを明らかにするため、古代を模

範としてオリンピックのプログラムや儀式にはさまざまな平和のシンボルが導入された。それらは1936年のベルリンオリンピックの儀式にも採用されたが、ハヨー・ベルネットが指摘したように、かなり曖昧に解釈されたり、そもそも意味がまったく逆のものに変わったりすることもあった⁵⁰⁾。

最初の平和の表象は人類の進歩を象徴するオリンピックのモットー「より速く、より高く、より強く」である。前述したように、クーベルタンはより優れたスポーツのパフォーマンスという技術的・スポーツ的な進歩だけでなく、啓蒙思想やイマヌエル・カントの思想と同様に、スポーツを通じ、またスポーツの助けを得て人間が個人的にも成長できると信じていた。その前提となるのが適切なオリンピック教育である。このスポーツ教育を通じて人類は平和に貢献することができるのだ、と。

もうひとつの平和のシンボルは5つの輪で構成されるオリンピック旗である。これは相互に織り合わされた5つの大陸を表象している。したがって、オリンピック旗は平和のシンボルだけでなく、スポーツの国際主義と普遍主義、あるいはノルベルト・エリアスが文明化の過程を特徴づけた「相互依存性や社会的結びつきの拡大」のシンボルでもある⁵¹⁾。クーベルタン自身がオリンピック旗をデザインし、1913年に初めて公に披露された。

平和の象徴としてはオリンピック聖火も挙げられる。古代を模して聖火は光、暖かさ、そして比喩的には悟りを象徴している。1936年のベルリンオリンピック以来、聖なるオリンピアの地で聖火が採火され、聖火リレーによって開催地まで運ばれた。しかし、ナチスドイツで開催されたこのオリンピックでは、まさにこの火と旗の象徴性がナチス政権によって政治的にファシズムの象徴として再解釈されたのである⁵²⁾。

炎が燃え続ける限り「城内平和」が守られる。古代では「エケケイリア」と呼ばれていた⁵³⁾。1972年のミュンヘンオリンピックの文脈で社会学者ヘルムート・シェルスキーは、この城内平和の考え方を「一

時的な平和」と表現した⁵⁴⁾。しかし、クーベルタンが古代を参考にしたとはいえ、古代のエケケイリアは現代オリンピックの平和の理念とは別の意味合いを持っている。古代オリンピアでは陸上競技や馬術競技を含むオリンピックの祭典が何事もなく行われることを保証する必要があった。オリンピックの祭典は永続的な平和（アイレーネー）という概念とはほとんど関係がない。古代の選手たちは、現代のように世界をより平和にするためのスポーツの模範や象徴ではなかった。彼らはボリス（都市国家）の軍事力の象徴であり、代表者だったのである。

1935年の「パックス・オリンピア」演説で、クーベルタンは「城内平和」つまり一時的な平和という概念を自ら取り上げた。それはすなわち、大会期間中は争い事を休戦することで若者たちを最もよく称えることができるという理由からだった。しかし、彼の平和の考えはシェルスキーが解釈したような単なる一時的な休戦、つまり「一時的な平和」以上のものだった⁵⁵⁾。むしろ、それは現代世界における平和の象徴であるべきだった。そのため、ミュンヘンでパレスチナのテロリストたちがイスラエルオリンピック代表チームを襲撃した事件は、「一時的な」オリンピックの平和を中断しただけでなく、スポーツという平和の象徴、つまり競技やスポーツを通じてより平和な世界を実現するというユートピアを破壊してしまったのである。当時のIOC会長ブランデージはこれを容認できず、「大会は続けなければならぬ！」⁵⁶⁾と要求した。そしてブランデージはその理由についてもこう述べた。「私たちは大会を純粹で誠実なものと保ち、選手たちのスポーツマンシップを他の分野にも広めようという努力を続けなければならない…」⁵⁷⁾。

古代を模範として選手やコーチ、審判員がスポーツのルールを遵守し、公正な競技を行うことを誓約するオリンピックの誓いは古代にルーツを持つが、人びとが平和に共存するためにはルールや法律を遵守しなければならないという啓蒙思想も刻印されている。オリンピックの誓いは、政治の世界では戦争

を防止または回避するために国家間で締結される国際条約に相当している。

世界中の若いアスリートたちが競技会場の外で出会い交流するオリンピック村はオリンピックの平和理念に由来する。なぜなら、競技会の外で「世界の若者」たちが直接出会う場所となるからである。この理念は1924年のフランス・コロンブ大会、特に1932年のロサンゼルス大会で既に実現されていた。1936年のデーベリッツ会場のベルリン大会では、島あるいは「平和の村」と称されたオリンピック村が設けられ、このモデルは近代オリンピックの統一理念の一部として定着したのである⁵⁸⁾。

1935年のラジオ演説で、クーベルタンは大会主催者たちに開会式で「ベートーヴェンの交響曲第9番」の「歓びの歌」を「大規模な合唱団」に歌わせるという彼の要望に応えてくれたことに感謝した⁵⁹⁾。フリードリヒ・シラーの詩を歌詞にしたベートーヴェンの交響曲第9番は、クーベルタンにとってスポーツの平和の理念、すなわち「すべての人間は兄弟である」という理念が運動、遊び、スポーツの自由という理念と結びついていることを示している。オリンピックスポーツは遊び心を持って、つまり気楽に、楽しく、目的を持たず、シラーが1795年に手紙の形で発表した論文「人間の美的教育について」で特徴づけたように行われるべきなのである。

7. ノーベル平和賞受賞者

1937年にジュネーブで亡くなったクーベルタンは、1936年にベルリンで全世界に向けて平和の意志を表明し、後に欧州賛歌となる歌を披露したが、その同じドイツ政府によって第二次世界大戦が勃発することにすることはなかった。ベルリンオリンピック組織委員会のテオドール・レヴァルト会長は、他のIOCメンバーとともにオスロのノーベル委員会にピエール・ド・クーベルタンにノーベル平和賞を授与するよう提案した⁶⁰⁾。しかし、その提案は実現しなかった。クーベルタンとIOCは悪魔と手を組み

平和運動としての信頼性を失ったのである⁶¹⁾。1935年のノーベル平和賞は、強制収容所に投獄され拷問を受けたカール・フォン・オシエツキーが、また1936年のノーベル平和賞はアルゼンチンのカルロス・サアベドラ・ラマスがそれぞれ受賞した。ノーベル賞委員会はオシエツキーへの授賞について、権威主義的な政権を持つ国々によって行われている好戦的な政策に対する抗議、そして平和の理念への賛辞であると説明している⁶²⁾。

1936年のオリンピック以降、スポーツは平和運動としての信頼性を完全に失った。その後、スポーツ、IOCあるいは個々のスポーツ関係者を再びノーベル平和賞の候補として指名する試みは失敗に終わった。しかし、IOCは今日でも国際的なオリンピックスポーツはより平和な世界に貢献できるし、貢献したいという主張を堅持している⁶³⁾。

冷戦時代、この考え方の持続的な価値を支持したのは平和主義者であり、1959年のノーベル平和賞受賞者は、「オリンピック・スポーツマン」、英国の政治家、大臣であったフィリップ・ノエル＝ベーカー卿（1889-1982）だった。しかし、彼がノーベル平和賞を受賞したのはスポーツへの貢献ではなく、国連創設への関与によるものだった。1980年、モスクワオリンピックに関連してジミー・カーター大統領率いる米国がソ連のアフガニスタン侵攻を理由にオリンピックをボイコットしたことに対する見解を求められた際、ノエル＝ベーカーは1936年のオリンピックに言及して次のように応答している。彼によれば、1936年のオリンピックのボイコット呼びかけは、「オリンピック運動に対する完全な無知」に基づくものだった、と⁶⁴⁾。

1980年、彼は1936年にベルリンに行かなかったことを後悔したと述べている。当時、彼は原則的な考え方からその決断を下した。「ヒトラーはユダヤ人、カトリック教徒そして『労働者』をドイツ代表チームから排除したのであり、オリンピック憲章に違反した」と。しかし、今ではその決断について違った見方をしている。「1980年、私はベルリンに行かなかっ

たことを後悔している。ケンブリッジ大学史上最高の選手の一人であるゴドフリー・ブラウン（ベルリンオリンピックで金メダルを獲得した英国4×400mリレーの最終走者）が、4×400mリレーの最終走者として見事な走りを披露し、英國にオリンピックの最高栄誉をもたらした姿を見られなかったことを私は生涯後悔し続けてきた」。ベルリンオリンピックは、当時すでに絶対的な権力を握っていたヒトラーによるドイツの専制的な支配を強化することにはならなかった。むしろその逆だった。

「オリンピックは彼[ヒトラー]に壊滅的な屈辱をもたらした。彼がスタジアムに卍のマークとナチスのスローガンを掲げたとき、国際オリンピック委員会は即座にそれらを撤去するよう命じた。彼はそれに従わざるを得なかった。その事実は一日も経たぬうちに彼の国民に知れ渡った。さらに重要なのは、この大会がドイツ国民に伝えたメッセージである。ヒトラーの『アーリア人種主義』や、ドイツの軍事力に関する彼の軍国主義的な戯言は、虚偽であり愚かで卑劣なものだというメッセージだ。世界最高のアスリートは黒人男性たち——4つの金メダルを獲得したジェシー・オーエンス、ウッドラフらであり、これらの偉大なアスリートたちは同時に素晴らしい人間性を持つ者たちであり、すべての人びとから愛され尊敬されているというメッセージであった。」

しかし、IOCがヒトラーに卐十字旗の撤去を命じたわけではないことはスポーツ史研究において明らかである。ノエル＝ベーカーはこの点で誤りを犯している。しかしながら、スタジアムで実際に起こった出来事、有色人種アスリートたちの目覚ましい勝利、そしてとりわけドイツ人選手を含むすべてのアスリートたちが競技の対戦相手や国際スポーツにおける友人に対して示した公正でスポーツマンシップに富んだ態度はドイツ国内および世界中のいびとに「オリンピックが劇的に、そして感動的に示しているように、すべての国々が共通の利益と共通の友情によって結ばれている」ことを示したのであり、これらは彼の見解を裏付けている⁶⁵⁾。

ノエル＝ベーカーの尽力もあって、国際的に活動するスポーツ組織、特にIOCは赤十字などの他の非政府組織（NGO）とともに、国連やユネスコにとって世界平和の取り組みにおける重要な役割を担う存在と見なされ、その活動に関わることになった⁶⁶⁾。国際的なスポーツ政策や協力もユネスコの枠組みの中で調整された。アメリカ人のエイブリー・ブランデージが率いるIOCは、冷戦時代、軍事的に高度に武装した東西ブロック間の橋渡し役として活動した。IOCのこの平和政策の最も顕著な例は東ドイツと西ドイツのオリンピック委員会の関係をめぐる取り決めて見られた。IOCはドイツからは1つの合同チームのみがオリンピックに参加できると主張した。1972年のミュンヘンオリンピックで初めて東西ドイツからそれぞれのシンボルを掲げたチームが参加した⁶⁷⁾。

だが、ミュンヘン大会以降、国際テロリズムや「ハイブリッド戦争」によって平和は脅かされ続いているのである⁶⁸⁾。

8. 「平和のためのスポーツ選手」

1970年代に冷戦が激化し、東西で大規模な核軍拡が進み、ベトナム戦争やソ連のアフガニスタン侵攻があったことを受け、世界中で新たな平和運動が生まれた。西ドイツでは特に学生運動世代や多くのスポーツ選手たちがこの運動に参加した⁶⁹⁾。ピ埃尔・ド・クーベルタンを中心とした創設世代のオリンピックの平和運動とは異なり、「スポーツ選手のための平和」運動はIOCやスポーツ組織ではなく、スポーツ選手自身によって学術的なスポーツ組織（例えば、ドイツ大学スポーツ連盟）や、1970年代からドイツ連邦共和国で新たに形成され始めたスポーツ科学分野の一部などの知的なオピニオンリーダーたちによって主導された。このイニシアティブは伝統的な競技スポーツの原則、内容、形態、価値観に対抗する幅広いオルタナティブなスポーツ運動の一部だった。特に、トップスポーツの基本原則であるパ

フォーマンスと進歩、記録と競争に対する批判が寄せられたが、クーベルタンにとってアゴン（競争）はオリンピックスポーツとその平和の理念の中核を成していた⁷⁰⁾。ダグマー・ハウナーは競争との対抗を志向するスポーツは「組織化された非平和のシステム」ではないかと問うている⁷¹⁾。

この批判とトップレベルおよびハイパフォーマンススポーツにおける客観的な制約と非人間性の増大を受けて、ハンス・レンクはオリンピックのモットーに「より人間的な」という属性を追加するよう提案した⁷²⁾。レンクはオリンピズムとスポーツにおけるパフォーマンスおよび競争の原則を熱烈に支持し、1960年のローマオリンピックでドイツポートエイトの金メダリストとなり、カールスルーエで哲学の教授を務めた人物だが、トップスポーツの非人間的な過激さを批判した。最近ではドイツ出身者として初めてIOC会長に就任したトマス・バッハがオリンピックのモットーに「コミュニティー」という属性を追加することを決めた。これは、「オリンピックファミリー」の多様化と差別化が進み、オリンピック運動の共通の価値観とアイデンティティが失われつつあることを反映したものと思われる⁷³⁾。

古典的なオリンピズムの平和の理念は力、強さ、競争に基づいていたが、1980年代の代替平和運動の一部である「スポーツ選手による平和運動」の平和主義は、これを拒絶した⁷⁴⁾。「軍縮による平和」が、これらの平和イニシアティブのモットーであり、力による平和ではなかった。教会も支持したこの非暴力平和主義は、特にドイツにおける中距離ミサイルの配備に関する議論の中で支配的だった。一方で抑止力と軍備増強、力と競争による平和は拒否された⁷⁵⁾。

1936年のオリンピックの主催者であり、その精神的な指導者であったカール・ディームは、1920年代から1930年代にかけて、オリンピズムの精神に基づき「スポーツは闘争である」というモットーを掲げていたが、1949年に著した著書『スポーツの本質と教え』では、スポーツを「より大きな生活領域である遊び」の一部に位置づけている⁷⁶⁾。これにより、

彼は新しいドイツ連邦共和国においてスポーツは政治、とりわけ軍隊から自由で自律的であり、目的のない遊びとして行われなければならないというスポーツ観を提唱したのである。1920年代には当然のこととされていたスポーツと軍隊との親和性は、もはや避けられるようになった。1981年、ハヨー・ベルネットは雑誌『スポーツ科学』誌における議論の中で、軍事スポーツは「疑似スポーツ」であり、スポーツではないと論じている。ヘルマン・バッハによる「ヴァイマル共和国における国民スポーツと軍事スポーツ」に対する彼の見解は、ナチスによるいわゆる権力掌握において軍事スポーツが果たした役割に強く影響されていた⁷⁷⁾。歴史的に見てベルネットの見解は正しくない。なぜなら、軍事スポーツの活動や競技、軍事予備訓練は常にスポーツとみなされてきたからだ。特に馬術、そしてバイアスロン競技もスポーツと軍事の親密さを示す事例である。

冷戦時代、特に1980年代のNATOの二重決定における平和運動の平和主義的なスポーツ構想と関連して、ドイツ連邦共和国のスポーツ科学において、スポーツと軍隊あるいはスポーツと警察といったテーマが、ほとんど、あるいはまったく扱われなくなるという結果をもたらした。ヘルクレス・ライマンの博士論文は、この分野について博士課程で書かれた唯一の学術論文である。ライマンは民間スポーツとドイツ連邦軍におけるスポーツの関係の難しさについて、とりわけ今日でも兵士の特定の身体訓練はスポーツ科学の観点からほとんど扱われていないことを論じている⁷⁸⁾。今日のドイツ連邦軍は軍事技術面だけでなく身体能力の面でも戦争に備える準備が整っておらず、「戦争遂行能力」を欠いている⁷⁹⁾。

「平和のための運動」のシンボルは、ピカソのスケッチや絵画に倣って、五輪の5つのリングではなく鳩に平和の枝をつけた。そのロゴは「国際平和航空」の東欧でのイニシアティブに引き継がれた。この国際自転車レースは、ツール・ド・フランスをはじめとする西側の古典的自転車レースに対抗するものだったが、「平和旅行」の名の下にソ連の保護下にあ

る社会主义東欧諸国の連帯にも貢献するものであった。東独での平和の旅は、トップドライバーのテーヴ・シュールに特に人気があった⁸⁰⁾。独立したスポーツ団体が主導したのではなく国家主導、政党主導の公式行事であり、ソ連側が進めた和平構想の一環だった。1957年にソ連が国連に寄贈したエフゲニー・ヴェチエティチ作の社会主义彫刻「鋤の刃」は、ニューヨークの国連本部前の庭園に今も飾られている⁸¹⁾。しかし、この構想はスポーツとは関係ない。それは1980年にも続き、「剣を鋤に」と呼ばれる新しい平和運動が東独の政府機関ではなく、反対派に基づいてプロテスタン트教会から形成された。しかし、1983年にプロテスタンツのフリードリヒ・ショルレンマー神父がルルーシュタット・ヴィッテンベルクにおいて美術工芸家のシュテファン・ナウによって鋤に鍛造された剣を手にしたとき、選手やスポーツ団体はこの華々しい動きに関与しなかったのである⁸²⁾。

1972年のミュンヘンオリンピックは、（スポーツ）政治的観点から平和、自由、理解の祭典であるはずが、恐ろしいテロ攻撃によって後景に退いてしまった。それは究極的には世界のすべての人びとが平和への理解を確認し、ミュンヘンでの平和を楽しむと信じていたにもかかわらず、治安面が露骨に無視されたために生じたテロ攻撃であった⁸³⁾。鳩は1896年に初めてアテネで開催されたオリンピックでも平和の象徴とみなされていた。

ミュンヘン大会以降、あらゆる主要スポーツイベントにおいて、安全上の配慮が中心的な役割を果してきた。国家によって実行・組織されるテロリズムは世界平和だけでなく世界のスポーツ界にも脅威を与えている。スポーツ団体は困惑し、無力感に苛まれているように見える。

9. 平和、国際主義そして民主主義

ケーベルタンは世界とスポーツが2つの方向に進むと分析したが、これはオリンピック運動の古典的

な平和創造思想である国際主義と民主主義の出発点であった。この発展の文脈においてスポーツは「平和の定着」に役立つ可能性を発展させることができると⁸⁴⁾。

スポーツにおける平和政策のための、この2つの前提条件はどうなのか？世界はかつてないほど国際化している。民族と国家はさまざまな形でつながっている。文化科学者のヘルマン・パウシンガーは、スポーツは「普遍的な文化的パターン」であり、国際的に伝播すると記した。国際化とグローバル化は、もはや覆すことができない事実である⁸⁵⁾。

民主主義はどうか。政治的、議会制民主主義的な意味での民主主義は21世紀初めに攻撃にさらされている⁸⁶⁾。政府が公正で自由な選挙を通じて誕生した民主的に統治された国家は、権威主義的で独裁的な国家の強力なブロックに直面している。長年にわたって構築されてきた国際機関のネットワークは崩壊の危機に瀕している。第一次世界大戦後の国際連盟のように、平和は国際協力によってのみ維持され強化されるという世界的な認識に基づいて設立された国連は、統治する能力を失っているように見える。IOCが組織する国際スポーツ運動がオリンピック憲章に掲げられた平和な世界に貢献するという約束を果たす意思と能力があるかどうかについても疑問が高まっている。しかし、歴史家のヘドヴィヒ・リヒターや社会学者で人間科学者のノルベルト・エリ亞スが論じるように、民主主義に対する異なる理解を前提とすると状況は異なってくる⁸⁷⁾。世界はあらゆる分裂、危機、紛争、戦争にもかかわらず、より緊密になってきた。相互依存が高まっているのである。世界中でますます多くの人びとが公的生活、経済、文化、政治に参加している。エリ亞スが言うところの「機能的民主化」のプロセスは民主的な憲法を知らず、独裁者や独裁者によって統治されている国家や社会を含む文明化のプロセスの一部である⁸⁸⁾。彼が指摘するように、国際化と機能的民主化は文明の過程におけるコインの両面である。

スポーツはこの機能的民主化のプロセスの重要な

アクターと言えるだろう。IOCやFIFAを含む国際スポーツ組織は国連よりも多くの加盟国を有しており、仮に「民主的」とみなすことができないにしても、出身、性別、宗教、年齢、身体的およびその他の障害にかかわらず、すべての大陸からスポーツを推進する人びとの集団を代表している。彼らはスポーツに参加し、どのような役割であれそれを積極的なスポーツ運動として特徴づける。彼らはお互いに對して、平和的かつ誠実に運動することが可能であることを示している。これはIOCのように民主的に正当化されていなくても非政府組織としての国際スポーツ組織に特別な責任を課しているのである。

しかし、IOCはスポーツの平和構築概念の守護者および擁護者として、戦争を起こし、自由と人権を踏みにじり、国際的に合意された国際法に違反し、戦争犯罪の責任を負う政権とも関係を結ぶ中で、果たしてこうした役割を果たしているのかどうかという深刻な問題と直面しているのである。

10. スポーツにおける。スポーツを通じた 平和と自由—希望的展望

オリンピック憲章はスポーツを「人権」と宣言している。強制力はないものの、IOCによって組織されたオリンピックファミリーのすべてのメンバーは、すべての人びとがこの権利を行使できるようにすることに同意している。同時に、スポーツに対する人権はスポーツに参画しない権利及び自由を意味している。

強制によるスポーツはスポーツに対する人権を侵害する。ドイツの大学が授与した論文のタイトルにある「強制収容所でのスポーツ」は⁸⁹⁾、スポーツではなく拷問と人間的屈辱の戦略の一部であり、オリンピック憲章で定められたスポーツに対する人権とは正反対のものであった。ネルソン・マンデラが自伝で述べたように、スポーツは人間の自由に属するという事実の一例である。彼はそこで、彼自身がローベン島で監禁されている時に拷問者や刑務所の監督

者の許可を得てボクシングの試合を含むスポーツを組織し、運営した方法を論じている⁹⁰⁾。彼にとってスポーツは自由のために立ち上がる手段だった。しかし、マンデラと仲間の囚人たちは、この移動の自由を限られた方法でしか理解できなかった。眞の平和は自由なくしては達成できない。「自由のない平和は平和ではない」とアデナウアーは語っている⁹¹⁾。

マンデラに関する記述は、南アフリカの「自由への長い道」が平和的であることを保証するためにスポーツが具体的に貢献した事例である。しかし、東西ドイツの人びとのスポーツ的な社会化が1989/90年のドイツ統一、すなわち新たに設立されたドイツ連邦共和国への東ドイツの加盟の実現に役立ったという議論は実証されていない。平和には自由が必要であり、どちらも戦わなければならぬ。エルンスト・ブロッホは「スポーツの練習でさえ、望ましい、希望に満ちたものであり続けています」と書いている。「それはまた、彼がゆりかごで歌われた以上のものになるために、体でより多くのことをしたいと思っています」。オリンピックは、ブロッホが「スポーツの自由」と呼んだ「スポーツ運動」の未来のための世界的なプロジェクトであり、同時にスポーツの平和創造の理念でもあった。オリンピック憲章がこれまで述べてきたように、世界中の人びと、特に世界の若者を平等な立場で差別なく、平和と自由の中に集わせるべきであろう。

オリンピックスポーツの平和思想は、ハンス・キュングのプロジェクト「世界のエトス⁹²⁾」とよく似たビジョンである。ビジョンは、それを実現することに成功するかどうかによって判断されなければならない。平和はオリンピック競技における絶対的価値ではなく、人間の尊厳と人権の尊重、フェアプレーと結びついている。オリンピックスポーツと人間性、特にスポーツそのものの基本的価値の欠点や侵害があるにもかかわらず、しかしそのことを考慮しても、オリンピックの平和という考えは、スポーツの現実とそれを超えて現代社会における責任ある人間としての行動の両方を嚮導する倫理的かつ道徳的

な羅針盤であり続けている。

このユートピアはこれまで以上に困難に直面している。エルンスト・ブロッホは、社会的・政治的状況の変化を、その実現のための前提条件と見なした。「決してひるまない人びとの中でのみ、希望が現実になることができる。スポーツには自由が必要だ」。自由の中でのみ平和は可能なのである。

注

- 1) 文化的な意味理論はゴットローブ・フレーゲの哲学に遡るが、ここで詳しく論じることはできない。Kleemeier, Ulrike. *Gottlob Frege: Kontext-Prinzip und Ontologie*. Freiburg im Breisgau und München: Alber, 1997.
- 2) クーベルタン『オリンピックの思い出』より。クーベルタンが「陸上競技」について述べたことは、音楽、芸術、文学、演劇、映画、あるいはメディアやマスメディア全般など他の文化分野にも該当する。
- 3) Müller, Norbert, Hrsg. *Pierre de Coubertin, 1863–1937: Olympism. Selected Writings*. Lausanne: IOC, 2000, 585.
- 4) Rittberger, Volker, und Henning Boekle. „Das Internationale Olympische Komitee: Eine Weltregierung des Sports?“ In *Olympischer Sport: Rückblick und Perspektiven*, hrsg. von Ommo Grupe, 127–55. Schorndorf: Hofmann, 1997.
- 5) IOC. „Olympic Charter,“ 15. Oktober 2023. <https://stillmedab.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/General/EN-Olympic-Charter.pdf>.
- 6) IOC. „Olympic Legacy.“ <https://olympics.com/ioc/olympic-legacy> (aufgerufen am 21. Januar 2024).
- 7) Jütting, Dieter H., und Michael Krüger, Hrsg. *Sport für alle: Idee und Wirklichkeit*. Münster: Waxmann, 2017.
- 8) Krüger, Michael. „Was ist alternativ am alternativen Sport? Zur Analyse, Standortbestimmung und Kritik einer alternativen Spiel- und

Bewegungskultur.“ *Sportwissenschaft* 18, Nr. 2 (1988): 137–59. doi:10.1007/BF03178115.

9) Jürgs, Michael. *Der kleine Frieden im Großen Krieg. Westfront 1914: als Deutsche, Franzosen und Briten gemeinsam Weihnachten feierten.* München: Pantheon, 2018.

10) Krüger, Michael. „Sport, Krieg und Frieden.“ *Sport und Gesellschaft* 19, Nr. 2 (2022): 245–52. doi:10.1515/sug-2022-0019, 246. オーウェルは「スポーツとは銃撃を除いた戦争である」という有名な言葉を残している(1945年)。これはまさに銃撃を除いた戦争との本質的な違いである。

11) オリンピックの平和理念に関しては, Höfer, Andreas. *Der Olympische Friede: Anspruch und Wirklichkeit einer Idee.* Sankt Augustin: Academia, 1994. とりわけクーベルタンについては Nigmann, Walter. „Pierre de Coubertin: Frieden durch Sport und Spiele; eine Analyse der Coubertinschen Schriften zum Problem einer praktischen Friedenserziehung.“ Tübingen: Eberhard-Karls-Universität, Fakultät für Sozial- und Verhaltenswissenschaften, Dissertation, 1995.

12) Coubertin, Pierre de. *Olympische Erinnerungen: Mit einem Vorwort von Willi Daume.* Überarbeitete und aktualisierte Ausgabe. Frankfurt am Main und Berlin: Ullstein, 1996, 27.

13) Willimczik, Klaus. *Leibesübungen bei Homer: Quellen zur Geschichte der Leibesübungen in der Antike.* Zusammengestellt und eingeleitet von Klaus Willimczik. Schorndorf bei Stuttgart: Hofmann, 1969.

14) Curtius, Ernst. *Olympia: Mit ausgewählten Texten von Pindar, Pausanias, Lukian. Photos von Martin Härlimann. Erläuterungen über den Sport und die Kampfarten der Griechen von Jürgen Ascherfeld.* Berlin: Atlantis, 1935, 11.

15) Diels, Hermann. Die Fragmente der Vorsokratiker: Griechisch und Deutsch I. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 3. Auflage, 1912, 88.

16) Elbe, Martin, und Frank Reichherzer, Hrsg. *Der Sport des Militärs: Perspektiven aus Forschung, Lehre und Praxis.* Berlin und Boston: De Gruyter Oldenbourg, 2023. 特に Herzog, Markwart. „Es gibt wirklich eine Synthese Soldatentum und Fußballkampf: Militär sport und Soldatenfußballmannschaften unter dem NS-Regime während des Zweiten Weltkriegs.“ In *Der Sport des Militärs: Perspektiven aus Forschung, Lehre und Praxis*, hrsg. von Martin Elbe und Frank Reichherzer, 299–338. Berlin und Boston: De Gruyter Oldenbourg, 2023.

17) Coubertin, Olympische Erinnerungen,27. ギュルデンプフェニヒによればスポーツが「平和の力」となる能力は本質的にその文化的に独立した役割に依拠している。Güldenpfennig, Sven. „Frieden und Sportpolitik.“ In *Handbuch Frieden*, hrsg. von Hans J. Gießmann und Bernhard Rinke, unter Mitarbeit von Andreas Schädel, 697–708. Wiesbaden: Springer VS, 2019. <https://perma-link.obvsg.at/AC16301475>; doi.org/ 10.1007/978-3-658-23644-1_51.

18) Coubertin, Olympische Erinnerungen.「国際的かつ民主的」という言葉は1892年のソルボンヌ大学での演説にも既に登場している（注22参照）。

19) Müller, Coubertin, 149–54, 739. クーベルタンは、ラグビーのようなスポーツを特に民主主義教育の手段として重視した。なぜなら、個々の選手は闘志と決意そして連帯と公正さを示す必要があったからである。Nigmann, „Coubertin,“ 117–20.

20) British Olympic Council. *The Fourth Olympiad: Being the Official Report. The Olympic Games of 1908 Celebrated in London Under the Patronage of His Most Gracious Majesty King Edward VII and by the Sanction of the International Olympic Committee.* London: Spottiswoode & Co. Ltd., [1909]. Digitally published by the LA84 Foundation, <https://digital.la84.org/digital/collection/p17103coll8/id/8219>. 793.

21) Gisbertz-Astolfi, Philipp. *Ethik des Krieges.* Baden-Baden: Nomos, 2024.

22) Krüger, „Sport, Krieg und Frieden.“

23) Ignatieff, Michael. *Die Zivilisierung des Krieges: Ethnische Konflikte, Menschenrechte, Medien*. Hamburg: Rotbuch, 2000. Münkler, Herfried. *Die neuen Kriege: Zur Wiederkehr eines historischen Musters*. Stuttgart: Württembergische Landesbibliothek, 2022. doi:10.53458/books.71. Baberowski, Räume; スポーツの文明化に関して, Elias, Norbert, und Eric Dunning. *The Quest for Excitement: Sport and Leisure in the Civilizing Process*. Oxford, Cambridge, Mass.: Blackwell, 1993.

24) Coubertin, Manifeste Olympique, 58.

25) Coubertin, Manifeste Olympique, 58: 「漕ぎ手、走者、そしてフェンシング選手を輸出しよう。これが未来の自由貿易システムであり、それが古き良きヨーロッパの文化に統合される日、平和の大義は新たな力強い支持を得るであろう。」この資料の批判的評価については, Clastres, „Manifesto.“ クラストレス自身、この演説原稿はオリンピック宣言と呼ぶことはできないと考えている。当初の題名は「1892年11月、ソルボンヌ大学におけるUSFSA 創立記念式典における講演」であった。

26) Clastres, Patrick. „The Allegedly 'Olympic Manifesto' of Pierre de Coubertin (25 Nov. 1892).“ In *A History of Sport in Europe in 100 Objects*, hrsg. von Daphné Bolz und Michael Krüger, 246–49. Hildesheim: Arete, 2023. Coubertin, Pierre de. *Le Manifeste Olympique*. Lausanne: Les Éditions du Grand Pont, 1994 (1892).

27) Kant, Immanuel. *Zum ewigen Frieden: Ein philosophischer Entwurf*. Durchgesehene und bibliographisch ergänzte Auflage. Ditzingen: Reclam, 2022, 855. 「我々は野蛮な未開国家を脱し、国際連盟に加盟しなければならない。国際連盟においては、たとえ小さな国家であっても自國の力ではなく、この偉大な国際連盟、統一された力、そして統一された意志の法に基づく決定によってのみ、その安全と権利が保証される。」（「コスモポリタンな目的を持つ普遍史の理念」の第7文）。 Willimczik, Klaus. *Leibesübungen bei Homer: Quellen zur Geschichte der Leibesübungen in der Antike. Zusammengestellt und eingeleitet von Klaus Willimczik*. Schorndorf bei Stuttgart: Hofmann, 1969, 35–45 und 注3. ウィラシェクは、カントの著作はサンピエール神父の和平提案（1712年）に遡ると指摘し、その著作はルソーによって取り上げられた（Extrait du projet de paix perpétuelle de monsieur l'abbé de Saint-Pierre, 1761）他方でカントはルソーを大いに評価しており、もちろんピエール・ド・クーベルタンもルソーの著作に精通していた。

28) 以下はウイラシェクの解釈に依拠している。

29) Kant zit. nach Willaschek, *Kant*, 55–56.

30) Willaschek, *Kant*, 56.

31) Willaschek, *Kant*, 44. ウィラシェクは平和政策にとって平和条約が重要になったのは「多少の遅れ」、より正確には第一次世界大戦後のアメリカ大統領ウッドロー・威尔ソンの14か条の計画を経て、最終的には1920年の国際連盟の設立を経てのことだったと指摘する。

32) Suttner, *Die Waffen nieder!* Die gleichnamige Zeitschrift erschien bis 1899.

33) Kémény zit. in Kluge, Volker. „Pierre de Coubertin, die Deutschen und der Friedensnobelpreis.“ In *Sport – Frankreich – Deutschland: Transnationale Perspektiven in Geschichte und Gegenwart / Sport – France – Allemagne: Histoire et présent dans une perspective transnationale*, hrsg. von Philipp Didion, André Gounot, Dietmar Hüser und Manfred Lämmer, 23–43. Baden-Baden: Academia bei Nomos, 2024, 25; Kluge, „Rebels“ zu Kémény Lechner, Franz Kémény.

34) Hamer, Eerke U. *Willibald Gebhardt: Der erste deutsche Treuhänder des Olympischen Gedankens*. Köln: Barz & Beienburg, 1970. ヴィリバート・ゲブハルトの伝記に関する情報は、「ドイツスポーツ殿堂」(<https://www.hall-of-fame-sport.de/mitglieder/detail/Willibald-Gebhardt>, 2024年6月6日)に掲載された彼の肖像画を参照しており、これはエールケ・ハマーとフォルカー・クルーガーの研究に基づいている。

35) ゲブハルトは『ドイツはオリンピックに参加す

べきか？ドイツの体操選手とスポーツマンへの叫び』の中で、ドイツ国内のさまざまな動機について説明している。

36) Kluge, Volker. „The Rebels of 1894 and a Visionary Activist.“ *Journal of Olympic History* 27, Nr. 1 (2019): 4–21.

37) Hugler, Klaus. *Moritz von Egidy: Ich hab's gewagt! Vom preußisch-sächsischen Offizier zum streit baren Pazifisten*. Wilhelmshorst: Märkischer Verlag, 2001, 57. 戦時中と平和時のドイツ帝国におけるトゥルネンとスポーツの役割については、Krüger und Wittmann, „Turnen und Sport im Kaiserreich: Aufbruch in die Moderne?“ *Stadion: Internationale Zeitschrift für Geschichte des Sports* 46 (2022): 224–58. doi:10.5771/0172-4029-2022-2-224.

38) Ludwig, Johannes, und Wolfgang Thierse. *Abschied vom Pazifismus? Wie sich die Friedensbewe gung neu erfinden kann*. Freiburg im Breisgau: Herder, 2024. しかし、ルカによる福音書22章36節ではイエスは弟子たちに剣を身につけるようにも指示している。この提案はマルクヴァルト・ヘルツォークの著作に依拠している。

39) Nigmann, „Coubertin;“ Höfer, Andreas. *Der Olympische Friede: Anspruch und Wirklichkeit einer Idee*. Sankt Augustin: Academia, 1994.

40) Grupe, Ommo. „Gibt es ein Leitbild des olympischen Sports?“ In *Olympische Spiele: Bilanz und Perspektiven im 21. Jahrhundert*, hrsg. von Michael Krüger, 58–73. Münster: Lit, 2001, 58. オリンピック競技の教育的概念も、啓蒙思想、とりわけイマヌエル・カントの思想への志向を反映している。

41) Niehaus, Andreas. *Leben und Werk KANO Jigoros (1860–1938)*. Baden-Baden: Ergon, 2019, 130.

42) Coubertin, Pierre de. *Die gegenseitige Achtung. With the assistance of Manfred Lämmer and Norbert Müller*. Sankt Augustin: Academia, 1988 [1915].

43) Nebelin, Marian. „Agonale Sublimierung und Religio Athletae: Ernst Curtius und Pierre De Coubertin über Religion und Sport bei den Olympischen Spielen.“ *Nikephoros: Zeitschrift für Sport und Kultur im Altertum* 29 (2023): 47–123.

44) Nigmann, „Coubertin;“ Coubertin, Pax Olympica. クーベルタンは1935年のラジオ演説をはじめ、オリンピック選手の模範的な性質を強調した。

45) Coubertin, Pierre de. *Pax Olympica: Weltsendung des Reichssenders Berlin am Sonntag, dem 4. August 1935 mittags. With the assistance of Pierre de Coubertin and Carl Diem*. Berlin-Charlottenburg: Organisationskomitee für die XI. Olympiade Berlin 1936 e.V. [1935]. [Vorolympische Kampagne in drei Sprachen].

46) Willaschek, *Kant*, 38.

47) Willaschek, *Kant*; Gerhardt, *Kants Entwurf*.

48) Willaschek, *Kant*.

49) Willaschek, *Kant*, 36.

50) Bennett, Hajo. „Symbolik und Zeremoniell der XI. Olympischen Spiele in Berlin 1936.“ *Sportwissenschaft* 4 (1986): 357–97.

51) Elias, Norbert. *Über den Prozeß der Zivilisation: Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen*. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 197, 312–454.

52) Bennett, „Symbolik.“

53) この点に関しては、さしあたり Lämmer, Manfred. „Der sogenannte Olympische Friede in der griechischen Antike.“ *Stadion: Internationale Zeitschrift für Geschichte des Sports* 8/9 (1982/83): 47–84.

54) Schelsky, Helmut. *Friede auf Zeit: Die Zukunft der Olympischen Spiele*. Osnabrück: Fromm, 1973.

55) この文脈において注目すべきは、クーベルタンの1935年のラジオ演説がフランス語で放送されたという事実である。ドイツ語訳では中心となる用語「国際主義と民主主義」が「世界の人類と人民統治」と訳されていた。これはナチスのイデオロギーの文脈において、西側諸国の民主主義や国際連盟における国際主義や民主主義とは異なる意味合いを持つ用語であった。Curtius, Olympia.

56) Guttmann, Allen. *The Games must go on: Avery Brundage and the Olympic Movement.* New York: Columbia University Press, 1984.

57) Organisationskomitee für die Spiele der XX. Olympiade München 1972, Die Spiele, 38.

58) Hübner, Das Olympische Dorf von 1936.

59) Coubertin, Pax Olympica.

60) Kluge, „Pierre de Coubertin.“ 本稿はシュヴァーベンアカデミー・イルゼー会議「スポーツ・フランス・ドイツ：歴史と現代におけるトランスナショナルな視点」(2023年)での講演に基づき執筆した、それは多くの示唆に富んでいる。また、オリンピックの歴史に関する貴重な情報を提供してくれたアクトナーとヒューザー「会議報告」にも謝意を表したい。

61) Teichler, „Coubertin und das Dritte Reich;“ *Sportwissenschaft* 1982/1 (1982): 18–55. Teichler, „Coubertin und Hitler;“ *Stadion: Internationale Zeitschrift für Geschichte des Sports* 46 (2022): 6–22. Alkemeyer, *Körper, Kult und Politik: Von der „Muskelreligion“ Pierre de Coubertins zur Inszenierung von Macht in den Olympischen Spielen von 1936.* Frankfurt am Main: Campus, 1996.

62) Kaube, Jürgen. „Carl von Ossietzky: Vor 70 Jahren erhielt er den Friedensnobelpreis.“ *Tri büne: Zeitschrift zum Verständnis des Judentums* 44 (2005): 89–98. http://www.tribuene-verl.ag.de/ TRI_Ossietzky.pdf

63) Kluge, „Pierre de Coubertin.“ 40–41.

64) Anthony, Don W.J., Hrsg. *Man of Sport, Man of Peace. Collected Speeches and Essays of Philip Noel-Baker: Olympic Statesman, 1889–1982.* London: Sports Edition Ltd., 1991, 149.

65) Anthony, Man of Sport, 153.

66) Anthony, Don W.J. „UNESCO and sport development cooperation.“ In *Geschichte der Leibesübungen*, hrsg. von Horst Ueberhorst, 1185–98. Berlin: Bartels und Wernitz, 1989.

67) Balbier, Uta A. *Kalter Krieg auf der Aschenbahn: Der deutsch-deutsche Sport 1950–1972, eine politische Geschichte.* Paderborn u.a.: Schöningh, 2007.

68) Münkler, Herfried. *Die neuen Kriege: Zur Wiederkehr eines historischen Musters.* Stuttgart: Württembergische Landesbibliothek, 2022. doi:10.53458/books.71. Münkler, Herfried. *Welt in Aufruhr: Die Ordnung der Mächte im 21. Jahrhundert.* Hamburg: Rowohlt E-Book, 2023.

69) Schmitt, Rüdiger. *Die Friedensbewegung in der Bundesrepublik Deutschland.* Opladen: Westdeutscher Verlag, 1990.

70) Krüger, „Standortbestimmung.“ Lattke, Simon. *Vögeln statt Turnen: Neue linke, linksalternative und subversive Bewegungskultur in der Bundesrepublik Deutschland 1968–1989.* Essen: Klartext, 2019, 303–24では、環境政策と並んで、オルタナティブスポーツと身体文化運動の共通項として、平和と平和政策というテーマを強調している。

71) Bauer, Dagmar. „Spiele ohne Sieger: Praktische Versuche zur Friedenserziehung im Sportunterricht.“ *Zeitschrift für Entwicklungspädagogik* 7, Nr. 2 (1984): 22–24.

72) Lenk, Hans. „The Essence of Olympic Man: Toward an Olympic Philosophy and Anthropology.“ *International Journal of Physical Education* 21, Nr. 2 (1984): 9–14. Lenk, Hans. *Werte, Ziele, Wirklichkeit der modernen Olympischen Spiele.* Schorndorf bei Stuttgart: Hofmann, 2., verbesserte Auflage, 1972. レンクはすでに博士論文の中でオリンピズムについて論じている。オリンピズムの根本的な価値観に関する議論については、Müller, Messing und Schormannによる文化的視点を参照。

73) IOC, „Olympic motto.“

74) Lattke, „Bewegungskultur.“ 新たなスポーツ平和運動の重要な創始者であるスヴェン・ギュルデン・シップフェニヒの著作は、この点において基礎的な意味をもつ。Güldenpfennig und Meyer, *Sportler für den Frieden; Güldenpfennig und Wiewiorra, Sportler für den Frieden.* 後者では「アスリート・フォー・ピース」の取り組みをオリンピック競技の古典的な平和理念と結びつけよう努めた。

Güldenpfennig, Herausforderungen; Güldenpfennig, Sportpolitik; vgl. Tiedemann, „Frieden und Sport.“ 2024年のパリオリンピックを記念した論稿の中で、元スポーツ役員で学生・研究員として「アスリート・フォー・ピース」の取り組みに深く関わっていたヘルムート・ディーゲルは青い鳩のシンボルを掲げた「スポーツの平和ミッション」を訴えている。Digel, Helmut. „Der Sport hat einen Friedensauftrag: Ein Appell aus Anlass der Olympischen Spiele im Jahr 2024 in Paris.“ 6. Januar 2024. <https://sport-nachgedacht.de/essay/der-sport-hat-einen-friedensauftrag-ein-appell-aus-anlass-der-olympischen-spiele-im-jahr-2024-in-paris/>. dop/dpa. „SPD-Verteidigungsminister Boris Pistorius: „Wir müssen kriegstüchtig werden.““ Spiegel online, 29. Oktober 2023. <https://www.spiegel.de/politik/boris-pistorius-ueber-die-bundeswehr-wir-muessen-kriegstuechtig-werden-a-24366e1b-6689-4ee0-a4c0-d0c7ee0f854d>.

75) Schmitt, Rüdiger. *Die Friedensbewegung in der Bundesrepublik Deutschland*. Opladen: Westdeutscher Verlag, 1990.

76) Diem, Sport ist Kampf; Diem, Wesen und Lehre des Sports und der Leibeserziehung. 本書の初版ではタイトルに「スポーツ」のみが含まれていたが、第2版では「そして体育」が追加された。ここでは第2版1960年、3ページから引用。

77) Bennett, Hajo. „Wehrsport: Ein Pseudosport. Stellungnahme zu Hermann Bach.“ *Sportwissenschaft* 11, Nr. 3 (1981): 295–308.

78) Reimann, Herkules Otto. „Sport in der Bundeswehr: Zur Geschichte, Struktur und Funktion des Militärsports in der Bundesrepublik Deutschland.“ Münster: Dissertation Westfälische Wilhelms-Universität, 2015. urn:nbn:de:hbz:6-08289648727.

79) ドイツのボリス・ピストリウス国防相は、2023年10月にドイツ連邦軍の課題と再軍備の必要性について演説した。ピストリウスの発言は、dop/dpa「国防相」で引用されている。

80) 東独の平和旅行に関する独立した歴史批評的研

究は存在していない。それゆえ、フーンの『歴史』によるイデオロギー的に偏った描写に頼らざるを得ない。シーアの自伝、テーヴェを参照。

81) 残念なことに、今日、特に国連のロシア代表団は建物に入る際にこの像を通り過ぎてしまっている。もし彼らがこのシンボルを真剣に受け止めていたらウクライナへ侵攻することはなかったはずである。

82) この点に関しては Anonym, „Schorlemmer.“ における報告参照。

83) Schiller und Young.. München 1972: *Olympische Spiele im Zeichen des modernen Deutschland*. Göttingen: Wallstein, 2012. ミュンヘンオリンピックから50年が経過し、歴史家委員会はオリンピック村におけるイスラエル選手団へのテロ攻撃について更なる解明を求めている。 Bundesministerium des Innern und für Heimat, „Pressemitteilung.“

84) Coubertin, Olympische Erinnerungen, 27.

85) Bausinger, Hermann. *Sportkultur: Sport in der heutigen Zeit VI*. Tübingen: Attempto, 2006.

86) ドイツにおける民主主義の歴史を参照した歴史的観点に関しては、Richter, Hedwig. *Demokratie: Eine deutsche Affäre vom 18. Jahrhundert bis zur Gegenwart*. München: C.H. Beck, 2023.

87) Richter, Demokratie.

88) Elias und Dunning, Excitement; 機能的民主化の概念については、Elias, Soziologie, 59–65. 機能的民主化の概念の説明と批判的分類については Wouters, Cas. „Have Civilising Processes Changed Direction? Informalisation, Functional Democratisation, and Globalisation.“ *Historical Social Research* 45, Nr. 2 (2020): 293–334. doi:10.12759/HSR.45.2020.2.293-334.

89) Springmann, Veronika. *Gunst und Gewalt: Sport in nationalsozialistischen Konzentrationslagern*. Berlin: Metropol, 2019.

90) Mandela, Nelson. *Der lange Weg zur Freiheit: Autobiographie*. Frankfurt am Main: S. Fischer, 2. Auflage, 1994.

91) ドイツ連邦共和国初代首相コンラート・アデナウアーの有名な言葉は、1988年にハインツ・シュ

ヴァルツ（元連邦議会議員、ラインラント＝ブファルツ州内務大臣）から寄贈された記念碑に刻まれています。写真：「自由のない平和は平和ではない。」

92) この点に考察において、グンナー・ドレクセル氏に深く感謝したい。ハンス・キュングの「グローバル倫理プロジェクト」との比較については

Küng, Hans. *Handbuch Weltethos: Eine Vision und ihre Umsetzung*. München und Zürich: Piper, 2012. Digel, Helmut, und Ommo Grupe, Hrsg. *On Ethics, Globalization, Peace and Olympism: A Documentation = Über Ethik, Globalisierung, Frieden und Olympismus*. Tübingen und Köln: Völk, 2007.

